様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８７０６６１

研究課題名（和文）運動部活動指導時における指導者の声かけが学習者の自己能力認知の変容に及ぼす影響

研究課題名（英文）Effects of Coaching Feedback on Changes in the Self-Evaluated Soccer Competence through after School Soccer Club Activities

研究代表者
安部　久貴（Ambe, Hisataka）

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：４０６３４５５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では学校でのサッカー部活動の指導中における指導者の声かけに焦点を当て、指導者の発話分類指標を作成し、生徒に対する期待が部活動の指導者の声かけに与える影響および、その声かけを受けた生徒の自己能力評価の変容について検討することを目的とした。
その結果、【賞賛】、【励まし】、【叱責】、【直接的指導】、【間接的指導】、【統制的行動】、【親和的行動】、【その他】の８指標が発話分析指標として抽出された。また、指導者が期待をしている生徒に対して、より積極的に声かけを行っていることが明らかになった。さらに、【賞賛】や【直接的指導】といった声かけが自己能力評価の向上に正の影響を与え得る可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study focused on coaching feedback, and there were three purposes. First purpose was to create a new coaching feedback classification Indexes for analyzing coaching feedback. Second purpose was to evaluate effects of coaches’ expectations on coaching feedback. The last purpose was to clear relationships between coaching feedback and players’ self-evaluated soccer competence in after school club activities.
As results, the new coaching feedback classification indexes which have eight domains named (1) praise, (2) encouragement, (3) scold, (4) instructive, (5) questioning, (6) organizing, (7) friendly, and (8) other were created. In addition, it was revealed that the coach gave more coaching feedback to high-expected players than low-expected players. Furthermore, it was suggested that praise and instructive feedback would increase players’ self-evaluated soccer competence.

研究分野：体育・スポーツ心理学

キーワード：期待理論　有能感　フィードバック　サッカー　部活動

１．研究開始当初の背景

スポーツの指導場面において、学習者の効率的な学習を促すためには、指導者と学習者の効果的な相互作用を欠かすことはできない。しかしながら、サッカーなどのチームスポーツを指導する場合の多くは、限られた指導者の数で多数の選手を指導しなければならず、選手一人一人に対して同様の指導機会を提供することは難しくなるため、指導者からの指導は選手によって量的にも質的にも異なると推察される。このような、各選手に対する指導者からの指導の差異に影響を及ぼす要因の一つとして、指導者の選手に対する期待を挙げることができる。

観察法を用いて、実際のスポーツ指導場面における指導者の期待と指導行動の関係性について検討した先行研究では、指導者は期待値の異なる選手に対して量的にも質的にも異なる指導行動をとることが報告されている。例えば、梅崎（2010）は、Ｊリーグのジュニアユースチームを対象として指導者による競技力評価と発話について検討し、競技力評価の高い選手が中程度の評価の選手よりも多くの発話を受けていること、および能力の高い選手がプレー前やプレー中の直接的な示唆を多く受けていることを明らかにしている。

この研究結果からも指導者による能力評価や期待は、指導行動、特に選手に与えるフィードバックに影響を及ぼし得ると考えられるが、上述の研究に方法の面で問題があったことは否定できない。梅崎（2010）の研究では日本サッカー協会が発行する指導指針を参考に、指導者による選手の評価項目を「技術」、「身体能力」、「戦術・役割理解」、「モティベーション」、「パーソナリティ」と「可能性」の 6 つに細分化して選手の競技力を評価するという点では新しい試みであった。しかし、6 つの漠然とした項目だけでは、各項目の詳細な内容を反映しきれない可能性があることから、依然として期待の基となる指導者による選手の評価を十分に反映し切れているとは言い難く、指導者の期待を正確に評価するためには、指導者による選手の能力評価をより詳細に評価可能な尺度の作成が必要であった。

このような現状のなか、安部・落合（2012）は、165 名の指導者を対象に質問紙調査を実施し、中高生年代のサッカー選手の競技力評価を可能にする尺度を作成した。探索的因子分析の結果、指導者による選手の競技力評価尺度は、「状況判断を伴ったボールコントロール技能」、「性格・競技意欲」、「ドリブル技能」、「対人技能」、「持久力」と「スピード」の 6 因子から構成されている事を明らかにした。加えて、その尺度によって得られる競技力評価得点と選手に対する期待度に有意な正の相関関係があり、指導者による選手の競技力評価得点を用いて指導者の選手に対する期待を予測し得ることを明らかにした。

さらに、安部・落合（2012）は作成したサッカー指導者の期待値測定尺度を用いて、サッカー指導者の期待値と声かけの関係性について検討し、地区レベルの中学生年代のサッカークラブにおいて、期待値の高い選手は、期待値の低い選手に比べてより多くのプレーの示唆と賞賛といった声かけを受けていることも明らかにしている。

このように、指導者の期待と声かけの関係性については明らかになりつつある。しかしながら、この分野の研究をさらに進展させていくためには 3 つの課題がある。

まず一つ目の課題として研究対象を挙げることが出来る。これまでにスポーツ指導場面における期待と声かけの関係について検討した国内の研究（安部・落合, 2012; 梅崎, 2010）では、その対象が地域スポーツクラブを研究対象としており、学校の運動部活動を研究対象として扱っている研究は見当たらない。運動部活動における体罰が問題視されている昨今において、運動部活動時における指導者の言動の検討は急務である。

次に、二つ目の課題は観察における発話分析指標の再検討である。例えば、安部・落合（2012）も使用している梅崎（2010）が作成した分析指標の一つである、ポジティブ指標には〔褒め〕と〔励まし〕の両方が含まれているが、〔褒め〕は成功場面において、また〔励まし〕は失敗場面において多く用いられる発話である。そのため、指導行動分析をする際には〔褒め〕と〔励まし〕を分けて分類することによって、より詳細な発話の評価ができる可能性がある。

最後の三つ目の課題は、指導者からの異なる声かけが学習者に与える影響について縦断的な調査が行われていないことである。これまでの指導者の期待に着目した研究では、声かけの差異に注目が集まっており、指導を受けた学習者の変容について検討している研究は見当たらない。学習者の意欲や主体性の涵養が望まれている運動部指導においては、縦断的な調査を通じて学習者の意欲などに影響を及ぼし得る、競技に関する自己能力評価がどのように変容したのかについて明らかにする必要がある。

２．研究の目的

以上より、本研究では学校でのサッカー部活動の指導中における指導者の声かけに焦点を当て、再検討した分類指標を用いて、学習者に対する期待が部活動の指導者（教員）の声かけに与える影響について検討するとともに、その指導を受けた学習者の自己能力評価の変容について検討することを目的として、下記の調査を実施した。

（１）サッカー指導者の発話分析指標の再検討

（２）選手に対する期待が部活動の指導者の声かけに与える影響についての検討

（縦断調査）
（３）指導を受けた学習者の自己能力評価の変容についての検討（縦断調査）

３．研究の方法
（１）サッカー指導者の発話分析指標の再検討
年代および競技力の異なるサッカーチームを指導する複数の指導者の指導行動をVTR 撮影して指導者の発話の逐語録を作成した。その後、映像を確認して文脈を把握しながら指導者の発話をコード化した。コード化された発話をまとめて独立したカテゴリーを生成することによって、指導者の発話分析を可能にする新しい指標を作成した。これら一連の作業は、スポーツ心理学とサッカーもしくはその他の球技系スポーツ種目のうちの一つ以上を専門とする複数の専門家の合議によって進めた。

（２）選手に対する期待が部活動の指導者の声かけに与える影響についての検討（縦断調査）
ある一つの中学校のサッカー部を対象として、そのチームの指導者である教員のサッカー指導場面を VTR 撮影した。VTR 撮影の回数は 10 回で撮影期間は連続する 8 週間であった。撮影された声かけ内容は、研究（１）で作成した発話分析指標を用いて分類された。
VTR 撮影に先立ち、指導者が指導している各選手に対して抱いている期待値を評価した。この期待値の評価には、安部・落合（2012）が作成した「指導者による選手の競技力評価尺度」を使用した。この尺度は、「状況判断を伴ったボールコントロール技能」、「性格・競技意欲」、「ドリブル技能」、「対人技能」、「持久力」と「性格」の下位尺度から構成されており、サッカー指導者による多面的な選手の競技力評価を可能にする上、定量化された選手の競技力評価得点は、指導者の選手に対する期待を反映し得ることが明らかにされている。

（３）指導を受けた学習者の自己能力評価の変容についての検討（縦断調査）
指導者の声かけについては、研究（２）と同一データを使用した。
縦断的な学習者の変容を定量化する尺度としては、学習者の意欲や主体性に影響を及ぼすと推察されるサッカーに関する自己能力評価尺度を使用した。この尺度は筆者が作成中の尺度であるが、中学高校年代のサッカー選手 700 名以上を対象に調査を行い、「状況判断を伴ったパス＆コントロール技能」など 9 因子を下位尺度にもち、その信頼性および内容的妥当性、因子的妥当性については概ね良好な結果を得ている。この尺度を縦断調査の前後に実施し、その各下位尺度の変化と指導者から受けた声かけの関係について検討した。

４．研究成果
本研究では前述の研究目標を達成するために、三つの調査を実施し、下記の研究成果を得た。

（１）サッカー指導者の発話分析指標の再検討
サッカー指導者の声かけを分析したところ、【賞賛】、【励まし】、【叱責】、【直接的指導】、【間接的指導】、【統制的行動】、【親和的行動】、【その他】の８指標が発話分析指標に成り得る可能性が示唆された。

（２）選手に対する期待が部活動の指導者の声かけに与える影響についての検討（縦断調査）
選手に対する期待が部活動の指導者の声かけに与える影響について検討した結果、指導者の期待値の高低によって分けられた 2 群間の【その他】以外の声かけの合計頻度において、高群が低群に比して有意に高い頻度を示した。以上より、運動部活動を指導する指導者は期待をしている生徒に対して、より積極的に声かけを行っていることが明らかになった。

（３）指導を受けた学習者の自己能力評価の変容についての検討（縦断調査）
さらに、指導を受けた生徒の自己能力評価の変容について検討するために、生徒の自己能力評価の変容と指導者からの声かけの関係性について検討した結果、自己能力評価の合計値と【賞賛】および【直接的指導】の声かけの間に有意な正の相関関係が認められた。したがって、【賞賛】や【直接的指導】といった声かけが自己能力評価の向上に影響を与え得る可能性が示唆された。

＜引用文献＞
①安部久貴，落合優．(2012)．サッカー指導者の選手に対する期待と声かけの関係性．学校教育学研究論集，26 (1):55-67.
②梅崎高行 (2010)．サッカー指導における相互的なバイアス構成の検討．教育心理学研究，58(3):298-312.

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計　1　件）
①安部久貴、運動部活動指導時における指導者の声かけと期待の関係性、日本体育学会第 67 回大会、2016 年 8 月、「大阪体育大学（大阪）」

６．研究組織
(1)研究代表者
安部久貴（AMBE, Hisataka）

北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：４０６３４５５６